月華後宮伝6
～虎猫姫は冷徹皇帝と桃花を掴む～

織部ソマリ　Somari Oribe

アルファポリス文庫

https://www.alphapolis.co.jp/

目次

序章　5
第一章　虎猫姫は故郷を発つ　22
第二章　虎猫姫と不穏な出来事　66
第三章　後宮の虎猫姫　113
第四章　虎猫姫は盤上を歩く　169
第五章　虎猫姫と桃花（とうか）の祝福　222
終章　263

序章

月は、透きとおるような空気の中、月華宮を明るく照らす。
琥国の王女、月夜は滞在中の佳月宮で、素肌に上衣を羽織っただけのしどけない姿で月を見上げていた。
「ここも静かになったものよ。まったく虎になっての散歩がしやすい」
クスリと笑い、足裏についた土を指先で払う。
この後宮には現在、四人の月妃がいる。
上から順に、宦官の長を祖父に持つ、弦月妃・董白春。
元高位月官で、皇帝・紫曄やその側近、双嵐の幼馴染みである、暁月妃の赫朱歌。
武の名門の娘だが、柔らかな気質の薄月妃・陸霜珠。
そして、『神託の妃』であり紫曄の寵姫。琥国が求める白虎でもある、朔月妃・虞凛花。
本来、月妃は皇后・望月妃を含め九人揃っているものだが、押し掛け月妃候補の月

夜を含めても、ここには五人しかいない。即位後四年が過ぎた皇帝としては妃が少なく、さらに子もいない。

これが許容されていたのは『白銀の虎が膝から下りる時、月が満ちる』という、神託が下った凛花がいるからだ。

『月が満ちる』。

その文言は、月魄国(げつぱくこく)において『月』と称される皇帝に、慶事(けいじ)の兆しありとされた。さらに『満』という文字は満月を連想させる。

月を満たす満月。それは皇后・望月妃のことでは？　と解釈され、その他の解釈は定めぬまま、『白銀』の髪を持つ凛花が望月妃候補の『神託の妃』に選ばれた。

だが、そもそもこの神託は、先代皇帝の御代に出たもの。

代替わりにより無効になったかと思われていたが、即位した紫曄は後宮を閉じたまま、妃を迎える様子がない。

後継者となる子がいないのは困ると、持ち出されたのがこの神託だ。

神託は特別なもの。逃すことは許されない。

そして後宮が再び開かれ、凛花と他四人が入ると、紫曄はなぜか凛花だけを寵愛した。

一人の妃にしか興味を示さないのは困るが、それが『神託の妃』であるのは僥倖(ぎょうこう)。

神託が成就すれば、月の女神から祝福を得た皇帝と皇后となり、いずれ御子も誕生するのではないか。

凛花と紫曄は、そんな希望を向けられていたのだが――

「虞朔妃殿(ぐさくひ)は雲蛍州(うんけいしゅう)に帰郷中。弦月妃もいまだ謹慎中。どちらの宮も静かだったな」

弦月妃は、昨年の星祭(ほしまつり)で凛花に対し、祭祀(さいし)を台無しにするような嫌がらせをした。

月夜はその時、まだ月華宮にいなかったので伝聞でしかないが、月妃の資質に大きく欠けると判断されたのだろう。

「やはりワタシに毒を贈るような娘……とはいえ、新年になっても謹慎が解けぬままとは、予想外であっただろうな。ふふっ」

それは決定を下す前に、紫曄がいなくなったからだ。

月華宮は、皇帝不在となってしばらくが経つ。

新年の儀式を全て終えた紫曄は、晴嵐(せいらん)に月華宮を預け、闇夜(あんや)と連れ立ち雲蛍州へ向かった。だが、このことは側近にしか伝えていなかったそうで、紫曄が朝議を欠席したことで、官たちはその不在を知ったとか。

代理を務める晴嵐は、「主上は神託を叶えるため、朔月妃さまを迎えに行った」と話し、紫曄は月桃祭(げっとうさい)までに戻るとも言ったらしい。

「皇帝陛下は、どうしても行かねばならぬと言っていたそうだが……」

月夜は自身の腰元に目を落としクスリと笑う。そこにいつも下げていた琥珀の佩玉は、今はない。兄の闇夜に貸してやったからだ。

同じ人虎でありながら、黒虎と判明し王太子を降ろされた兄――月華宮では琥珀と呼ばれている闇夜に持たせてやりたくなったのだ。

（ワタシも甘くなったものよ）

あれは『虎を強くする』という謂れがあり、琥国の王太子『琥珀』の証でもある特別な佩玉だ。ならば後宮に残る月夜が持つよりも、ろくな準備もなく連れ出された兄が持つほうがいい。

それに旅に出た虎は闇夜だけではない。凛花も同じく、琥珀の佩玉が影響を及ぼす虎の一人で、しかも人虎の頂点である白虎だ。

しかし、月夜が欲しくて堪らない白虎という『月の祝福』は、凛花にしてみれば『呪い』のような、不要なものだという。

そもそも凛花は、虎化の謎を解くために後宮入りを決意した。皇帝の寵愛など求めていなかったのに、月に導かれるように、虎化した姿で紫曄と出会い、いつの間にか心を通わせるようになった。

「最下位の月妃が寵姫に収まれば、気に食わぬのも当然よ」

弦月妃に同情できる部分はある。それに紫曄の、凛花だけを寵愛するやり方は、月

夜が後宮に入る隙を生んだ。

「皇帝陛下は何を考えているのやら」

寵姫を作るのはいい。だが、他の妃には目もくれないのはいただけない。

せめて凛花が懐妊していれば状況は変わっただろう。

皇帝という地位にありながら、積極的に子を作る素振りはなく、寵姫も懐妊しないとなれば妃が増えていくのは当然だ。国の安定には後継者が必要。なんとか子が生まれる確率を上げようと、臣下は新しい妃を見繕う。

そして利害が一致した、月夜が後宮に滞在することになった。

紫曄の子を望むのは、月魄国内だけではなかったのだ。

琥国は人虎の国。それも白虎を頂点とする。月魄国ではもう忘れられているが、実は紫曄も、人虎――白虎の血を受け継ぐ一人だ。

白虎の血脈は、月魄国の胡皇家を経て、雲蛍州の虞家に受け継がれている。月夜は強い女王として君臨するために、どうしても白虎の子が欲しい。

「……少々強引な手も使ったが、ここは居心地がよすぎてならぬ」

利益のため子を得ようと乗り込んできた自身や、琥王より白虎奪取の命を受け、さらに凛花に恋情を抱く闇夜のことを、紫曄は信用しすぎだと思う。

「まぁ、信用されて悪い気はしないが」

呟く月夜の口元には微笑みが。
月華宮に滞在するうちに、凛花に親近感を持つようになった。
月夜には、凛花に不利益を与えた自覚がある。
だが凛花は同じ人虎のよしみと言い、月夜を助け受け入れた。月夜にとって凛花は、今では秘密を共有する友人のようなものだ。
（虞朔妃殿は、桃の花が咲く頃の祝祭『月桃祭』までに、月華宮に戻らなければならない……）
『月桃祭』は琥国でも執り行われる祭祀だ。西王母の誕生祭であり、桃の祭。
そして月の女神と、その夫にまつわる神話において、桃は特別なものだ。
別離と夫婦愛を象徴し、子孫繁栄の意味も持つ。そこから月桃祭は、夫婦円満を願う祭という側面もある。
つまり夫婦が並ぶことが重要なのだ。
（虞朔妃殿が月桃祭を欠席すれば、望月妃の座を手にすることはできまい）
だが紫曄も、いつまでも望月妃を空位にはできないのが現実だ。
月夜の手元には、凛花が月桃祭までに戻らぬ場合は、最上位の月妃として出席を願う、紫曄からの書状が届いている。
月夜は凛花に、留守の間は望月妃になる工作はしないと約束した。だが、紫曄が望

んだ時には、応えさせてもらうとも伝えてある。
「月桃祭までに虞朔妃殿と二人で戻るか、それとも皇帝陛下が一人で戻るか……」
月の女神は誰に微笑むのやら。月夜はそんなふうに思い、窓辺で物思いに耽る。
――琥国で女王になる前に、月魄国で望月妃になるかもしれない。
そう考えた月夜は、後宮妃よりも自由な、客人という立場を利用して月華宮の様子を窺ってきた。
書庫や小花園、それから侍女たちに命じ、月華宮の表側の様子も探らせている。
とはいえ月夜自身は、凛花との約束を守り、ほとんど佳月宮を出ることなく過ごしている。というか、忙しいのだ。
凛花の帰郷に伴い、雪嵐が抜ける穴を埋めるため、機密は漏らさないという『月神誓約』を結び、兄と共に協力してきた。
『月神誓約』とは、高位月官の立ち会いのもと月の女神に誓う契約だ。誓約を破れば罰が下されるといわれている。
だが、その兄も紫曄と共に雲蛍州へ行ってしまった。そのせいで仕事が増え、暗躍などする暇がない。
「まったく、利よりも損が大きい。得をしたのは皇帝陛下のみか」
紫曄の代役を務める晴嵐は、武官の役割も果たしつつ、慣れぬ政務をこなしている

が、月夜の助けがなければ回っていないだろう。
その補佐をする老師と兎杜も、忙殺という言葉がぴったりの状況だ。神月殿経由で紫曄や凛花の支援をしている、朱歌にも応援を頼めたらと思ってしまう。
老師が凛花から請け負った、満薬草を普及させる根回しは足踏み状態だとか。
一方、兎杜は『後宮医局』を作れないかと、小花園の明明と相談を重ねているようだ。何やらあの小さな見習いには、大手柄が必要な野望があるらしい。
小花園といえば、薄月妃の霜珠もたまに見かけることがある。力自慢の侍女が多いと、力仕事を担っていた。多忙を極める明明の、大きな助けになっているだろう。
明明は、小花園で収穫した薬草を使い、化粧水や美容液、入浴剤などを作り後宮内に流通させ始めている。
「そういえば、陸薄妃がいる時は、必ずと言っていいほど兎杜の姿も見かけるな……？」
まさかな？　と思うが、月夜は野望を抱く者が嫌いではない。欲しいものを掴み取る努力をする姿は好ましい。
己も野望のためにここへ来たのだ。まだ王太子のうちに、我が儘が許されるうちに、白虎を獲得するための無茶をした。
（しかし王――皇帝となれば、こうはいかぬ）

国の頂点に立っているはずなのに、どうしてこうも不自由なのか。紫曄は凛花たった一人しか欲していないのに、それが許されない我が儘になってしまう。
この後宮もそうだ。紫曄が欲さなくとも、皇帝には必要なものだと用意される。
（堪ったものではない。皇帝陛下には同情する）
もしも琥国に人虎がたくさんいたら、女王となった月夜にも後宮が用意されたかもしれない。
血統や容姿で選ばれた男が勝手に用意され、一人ではなく、多くに身を委ねろと言われるのだ。志も野望も、責任感もある月夜でもさすがに嫌になる。
「ワタシも考えねばならぬか」
跡継ぎとなる子は必要だが、月夜が産む子のうち人虎は一人だ。男児なら確実に、女児なら半々。人虎の能力を有する子を産めば、月夜自身は人虎ではなくなってしまう。その能力を子に譲り渡す、人虎の女に定められた理だ。
（人虎であることは、ワタシが女王として君臨するための大きな力。できることなら、人虎のまま女王でありたい）
「それこそ無茶か……」
血を繋ぐことは、琥国においても王の重要な務め。琥国の王位継承では、男女の区別なく人虎であることが重要とされ、最優先となる。

しかし、それでも女王よりも男王のほうが歓迎される。子ができても男なら、月の祝福を持った強い人虎のままでいられるからだ。

月夜が産む人虎の子は、確実に次代の王となる。

それゆえに、月夜が女王となった後も力を振るうには、自らの力を継いだ強い跡継ぎが必要なのだ。できれば白虎の子が望ましい。

白虎を産めば、人虎でなくなった月夜にも、『白虎の母』としての価値と力が加わる。失ってしまった人虎としての影響力を取り戻せる。

白虎とは、そのくらい特別なのだ。

「ワタシが男であればなぁ」

月夜は、月を見上げた。この月が、人虎に力をもたらし、時に苦しめる。凛花は人虎の力を『呪い』と言い、月夜は『祝福』と呼ぶ。

「月は表裏一体……――」

あっ、と月夜は気づいてしまった。

「ワタシにもいるではないか。表裏一体の存在が」

黒虎の兄、闇夜だ。

黒虎はない者として扱われる。身分を剥奪(はくだつ)され、結婚も許されない。金虎(きんこ)の月夜とは、正反対の存在だ。

だが、黒虎の扱いを変えることは、女王の力で通せる我が儘の範疇(はんちゅう)にある。

（闇夜に嫁を取らせればいい。そして、生まれた子が人虎であれば……）

その子を養子にすればいい。それなら月夜は金虎のまま、人虎の後継者を得ることができる。

琥国にいたままだったなら、月夜はこんなことを思い付きもしなかっただろう。

琥国では、闇夜の顔を見ることすらなかった。月夜にとっても、黒虎の兄はいないも同然の存在だったのだ。だが月夜はこの国に来たことで、黒虎の兄とかかわることになり、手を取り合う兄妹になった。

「ふふ。こんな抜け道があったとは……そうとなれば、虞朔妃殿にはなんとしても戻ってもらわねば困る」

凛花が戻らなければ、月夜は望月妃となり、必ず子を産まなければならない立場に陥ってしまう。せっかく人虎の力を保持し続ける、いい案が浮かんだというのに！

「あの二人を信じるしかないか……いや、月にも祈ろう」

しかし凛花が人虎の祝福を返上し、無事に戻ってきたとして、月桃祭も無事に終えられるのか。月夜はそれも心配になってきた。

なぜなら、弦月妃が不気味なほど静かだからだ。

「月桃祭には弦月妃も出席するだろうが……あの娘、静かに引き下がるたちとは思

えん」

己の過ちを反省し、真摯に謹慎しているのならいいが――

◆◆◆

「白春さま。御文でございます」

「華やかな文だこと。大叔母様からね」

今、弦月妃・董白春に侍る侍女は、この貞秋だけだ。

白春は、銀簪を与えた侍女を常に大勢連れていたが、謹慎が長引くうち乳姉妹である貞秋しか側に置かなくなった。

当初、気位の高い弦月妃は謹慎に腹を立てるのみだった。だが長期に亘るうち、早期の謹慎解除を狙いこのようにしたのではと、弦月宮では囁かれている。多くの侍女を遠ざけ、慎ましやかに過ごし『反省している』と見せるためではないかと。

「――大叔母様は随分と乗り気ね」

香りまで華やかな文を閉じ、白春は静かに微笑む。

「こちらは順調だけれど、侍女たちや後宮内の様子はどうかしら。貞秋」

「はい。白春さまは後ろ盾である祖父にも見限られ、失意に沈んでいると噂になって

おります。それから朔月妃さまを迎えに行った主上に関しても、様々な噂や憶測が流れております」

「そう。ふふふ」

貞秋の報告によれば、紫曄は後宮をなくそうと考えており、月妃を揃えろとうるさい宦官も、同時に廃す検討をしているようだとか。

これらは以前にもあった噂だが、ここへ来て復活したらしい。

そして皇帝が月華宮を留守にしている不安からか、新たにこんな話も耳に届くようになった。

『神託の妃』が望月妃になったとして、本当に大丈夫か？　寵姫に溺れるのではないか。先代皇帝とは違い、寵姫の数は少ないがこれでは似たようなもの……という声だ。

神託の成就を願い、『神託の妃』を迎えにいった紫曄を評価したり、凛花を待望する声もあったりするが、紫曄の皇帝としての資質を疑問視する声もある。

「皆、噂話が好きなようで結構だこと」

白春は、紅梅が描かれた扇で口元を隠し、くすくすと笑う。

（わたくしの計画を知らなければ、貞秋も何がそんなにおかしいのかと思ったでしょうね）

この噂の一部は、白春と大叔母――董一族の反宦官長派が流したものだ。

白春は、もう祖父の言いなりになる気はない。
後宮に入ったところまでは、駒である己に納得していたのだ。董家の娘として当然だし、多くの娘がいる中、董家の姫として選ばれたことを誇りに思った。
『神託の妃』は最下位の朔月妃。自身は選抜された月妃で、最上位の弦月妃。
やはり董家の娘に敵はいない。望月妃となり、自身が女性の頂点に立つのだと信じて疑わなかった。
だが、その道に暗雲が立ちこめた。後宮を厭うていた皇帝が、寵姫を持つという予定外の出来事が起こった。その上、相手が『神託の妃』だと。
祖父のやり方で本当に望月妃になれるのか？　そう疑問に思いつつ、躾けられた通り、月妃に相応しい振る舞いをした。先代の御代で手にした董家の力も使った。
月華宮にも、忌々しい神託を出した神月殿にも、董家の弦月妃を推す者が多数。
なのに、うまくいかない。
白春は、自身が駒として最上であると自負している。家柄、教養、美しさ、それに健康。望月妃に必要なものを全て揃え、望月妃になる気概も持ち合わせている。
これで望月妃になれないのなら、それは駒を扱う者が無能なのではないか？
その思いは日に日に募っていった。
そして、とうとう皇帝紫曄は月華宮を飛び出し、寵姫を迎えに行ってしまった。

ここまでくれば白春にもわかる。自身が望月妃になることは決してないと。
だが祖父は違った。白春を廃し、代わりの娘を後宮に入れようとしているらしい。
紫曄は力で押し切れば折れる、そんな皇帝ではないというのに。
（先代とは違うと、まだ理解できないとは愚かすぎる。お祖父様は時代遅れなのよ）
皇帝が代わり、時代も変わった。後宮も、望月妃に求めるものも変わった。
弦月妃が持つ後ろ盾の力は、紫曄が欲するものではなかったのだ。
（それに、もしもあの主上の望月妃となっても、それはわたくしの望む皇后の姿ではない）
白春が望む、皇后望月妃の姿は頂点。
誰にも負けない、唯一の地位でなければならない。
（他の妃には目もくれず、朔月妃に執着する男の望月妃では意味がない）
もしも望月妃になったとしても、それは凛花を望月妃にできなかったから、仕方なく白春を据えただけ。
「愚かすぎる……」
白春は扇の陰で呟き、思う。
駒に甘んじていた己も、いまだ白春を駒だと思っている祖父も、白春を選ばない皇帝も、その気概もないくせに神託を頼りに望月妃になろうとしている凛花も、愚か者

ばかりだ。
横からしゃしゃり出てきて、後宮を引っかき回した琥国の王女も気に入らない。
ここは月魄国であって琥国ではないというのに、自身が頂点であると疑わぬ、あの鼻をへし折ってやりたい。
（思い知らせてさしあげましょう）
祖父には白春のほうが上手に駒を扱えると理解させよう。
凛花と王女には、女の頂点は白春であると見せつけよう。
皇帝には、たった一人を寵愛する愚かさを教えてやろう。
「貞秋。勝負は月桃祭までと心得よ」
「承知しております」
白春は扇を置くと筆を執り、祖父への文を書き付ける。
『主上は寵姫のために、後宮を変えようとなさっておいでです。月妃だけでなく、宦官をも廃そうとされるでしょう。お祖父様をはじめとした、宦官の地位を守らなければなりません』
『現状のまま月桃祭が終われば、我らは排除されるでしょう。ことを起こすなら、月桃祭まで』
『董家のため、ご決断ください。董家が新たな月を天に押し上げましょう。わたくしは、お祖父様と董家のために働きたく存じます』
祖父好みの駒は、後宮を追われることに怯える孫娘ではなく、頭は回るが切り捨てられる程度に愚かな孫娘だ。自身がまだ董家から見限られていないと思い、一族に尽くすと言う、けなげで愚かな娘。
（だからわたくしは、そのように振る舞い、祖父の野心と虚栄心をくすぐり操る。駒を持つのは、わたくしのほう）
「わたくしが皇帝の首をすげ替え、わたくしが望月妃になる」
わたくしは駒を演じながら、操っているつもりの男たちも、女も、全てを私が作る盤上に乗せて操ってやりましょう。
白春は心の中でそう決意すると、祖父への文を貞秋に預け、扇の陰でまた微笑んだ。

第一章　虎猫姫は故郷を発つ

寒々しい奥宮の、狭い牀を月明かりが淡く照らす。

そこに広がるのは銀の髪。銀の杯で『虎化しない薬』を飲み干し、月夜でも虎にならなくなった凛花だ。そして、その銀髪を覆い隠そうとするのは、紫曄の黒髪。

凛花の『早くあなたの妃になりたい』という願いは、月の下で密やかに叶えられていく。

（紫曄から甘くていい匂いがして、堪らない）

はくはくと息を吸いながら、熱い首筋に鼻先を押しつける。月を見上げても虎化しない体になったはずなのに、やはり満月が気分を高揚させる。

凛花は頭の片隅で何かがおかしいと思うが、分け合う熱に溺れ思考を手放す。

今はなんでもいい、やっと欲しいものが手に入る。早く紫曄を満たしたい。そんな急くような、どこか獰猛な気持ちで凛花は紫曄にしがみつく。

「紫曄……もっと」

がぶりと肩口に齧り付き、願いを口にする。

「いっ……、この、虎猫が」

紫曄はクスリと笑って凛花の耳を甘噛む。

「だって、まだ足りない……」

静まりかえった月の夜。この奥宮では、ヒソヒソ交わされる吐息まじりの会話もよく響く。

（麗麗が、雪嵐さまと奥宮の近くで控えていると言っていた）

――声が聞こえてしまうかもしれない。

凛花の頭に残った、一欠片の冷静な部分がそう思う。

それに凛花と紫曄が、奥宮から出てくるのを待っているのは、麗麗たちだけではない。琥珀や、いとこで次期虞家の当主である慧伯、凛花の両親も『虎化しない薬』を飲んだ凛花の帰りを待っている。

早くここを出て、薬が効いたと、この姿を見せるべきだ。

（だけど、今は抱き合いたくて堪らない）

恥ずかしさも申し訳なさも、体と心を満たし、痺れさせる、この喜びの前では消え失せてしまう。

「紫曄、もっと――」

凛花は古の儀式のように、奥宮で名実ともに皇帝の妃となった。

◆

「凛花、起きられそうか？」
ぼんやり目を開けると、覗き込む紫曄と目が合った。
心身が満たされるまで抱き合って、二人で薄い上掛けに包まっていたが……いつの間にか凛花だけ眠ってしまったようだ。
「着替えがある。ここで眠っては風邪をひく。戻ろう」
「ん……はい」
辛うじて返事をして起き上がったが、凛花は眠気に抗えず再び瞼を閉じてしまう。うつらうつら揺れる頭を抱き寄せられ、紫曄の胸にもたれかかる。
紫曄はクスリと笑いながら、虎猫と同じ丸い頭を撫で、少し乱れた銀の髪を梳く。
そんなふうにされたら余計に眠くなってしまう。凛花はそう思うが、起きなければという気持ちよりも、撫でられる心地よさに負けてしまう。
「仕方がない虎猫だ。凛花、ほら腕を」
「んー……」
凛花は寝ぼけまなこで、言われるがまま紫曄の手を借り衣を身につけた。

そして二人で奥宮を出ると、控えていた麗麗と雪嵐がホッとした顔を見せた。だが、それも一瞬だった。
紫曄の腕に抱きかかえられた凛花を見た麗麗は、サッと顔色を変えて駆け寄った。
「凛花さま！　主上、まさか薬が悪さを……!?」
「いいえ、違うのよ麗麗」
奥宮に用意されていた凛花の着替えに、靴がなかっただけだ。冷たい地面を裸足で歩かせるわけにはいかないと、紫曄がなんだか嬉しそうに言い、凛花を強引に抱き上げたのだ。
「今夜くらい、大切な俺の妃を抱えて歩きたかっただけだ。麗麗」
「紫曄。もう……早く戻りましょう。その、麗麗、雪嵐さま。お待たせしてごめんなさい」
今、月は頂点を随分と過ぎた位置にあった。奥宮で『虎化しない薬』を飲んだ時、満月は頂点にあった。ということは月が傾いただけの時間、二人を待たせていたことになる。
凛花は奥宮で紫曄と過ごした時間を振り返り、羞恥（しゅうち）に頬を染め俯いた。
「ふふ。紫曄、朔月妃さま。おめでとうございます」
愛おしそうに凛花を抱く紫曄と、耳まで赤くし俯く凛花に、雪嵐がクスリと微笑み

言った。
「――あっ。凛花さま！　おめでとうござ……」
「麗麗、いいから！」
後宮でもないのに、それを祝われるのは恥ずかしすぎる！　凛花が手を伸ばして麗麗の言葉を遮ると、紫曄がその手を取って指先に口づけた。
そして上機嫌な声で言った。
「朱歌の占いが当たるかもしれないな」

翌日。凛花は紫曄を伴い、あらためて両親に虎化しなくなったことを報告した。
それから父と慧伯には、『虎化しない薬』を飲む作法……儀式と言うほうが合っているかもしれない、薬の飲み方を話した。
虞家の当主として知っておくべきことだと思ったのだ。
いつか再び虞家に生まれるかもしれない人虎のために、薬と儀式について、しっかり記録を残しておいてほしいとも伝えた。
「虎のための薬草を集めた『隠し庭』があり、皇都にしかないはずの、奥宮まである雲蛍州にしかできないことです。お父様、慧兄さま、よろしくお願いします」
「もちろんだ」

凛花が下げた頭に、父がポンと掌で触れた。
幼い凛花のために『虎化しない薬』の研究をし、その試行錯誤の記録を全て保管していた父だ。きっと凛花の願いを叶えてくれる。
「しかし、銀の杯は俺が持ってきた、これ一つしかない。せめて後日、皇都で見つけた人虎関連の書物の写しを送ろう」
「感謝いたします、主上」
今度は凛花の父が頭を下げた。
『虎化しない薬』を飲むために必要なものは、満月、奥宮、銀の杯、桃の種。全てが揃わなければ、虎化という月の祝福を拒むことはできない。
（銀の杯……あれは輝月宮の書庫にあったのよね？）
紫曄の話では、先代の皇帝が奥宮から持ち出し、手元に保管していたものだという。今回、初めて紫曄自身の手で箱を開けてみたところ、杯が一つ入っていた。そしてその隣には、杯がもう一つ入りそうな空間があったそうだ。
（薬を飲むために必要な、奥宮も隠し庭も、皇都と雲蛍州の二箇所にある。それなら杯も二つあってよさそうなのに）
しかしそこに杯はなかった。
（もしかしたら、先代の主上が今も持っているのでは……？）

紫曄の父は今、琥国にいる。
（琥珀殿か月夜殿下に探ってもらえたら……ううん、今はそこまで動く余裕はないわ）
凛花には時間がない。月桃祭は次の満月だ。
それに琥珀たちにもそれぞれ抱える事情がある。
（皇位を追われた隣国の元皇帝なんて、政治的にややこしい存在よね）
特に王女は大きな事を企んでいるようだし、銀の杯に関しては、月魄国と琥国の両国が落ち着いてから探すことにしよう。
凛花は銀の杯について、そう心に書き留めた。
「――それでは、準備が整い次第出立いたしましょう」
雪嵐の声に、凛花はハッと顔を上げた。
ここからは今後の話だ。隣室に控えていた雪嵐、麗麗、琥珀も加わり、月華宮へ帰る段取りの打ち合わせになる。
「そろそろ皇都からの視察団が雲蛍州に到着します。帰路は彼らを護衛とし、堂々と月華宮へ帰還します」
（視察団……月華宮を出た時、途中まで一緒だった晴嵐さまの部下の方々ね）
本来、視察団の護衛任務を請け負うような者たちではない。精鋭と言える実力のある武官たちだ。
皇都を出てしばらくしたところで、凛花、麗麗、雪嵐は一団から密かに離脱したので、共に移動したのは短い道程だったが。
「しかし、随分と到着が遅れているな。昨夜の満月までには到着する予定だっただろう」
紫曄が言う通りだ。凛花も確かにそう聞いていたのだが……？
「ええ。その予定でしたが、想定以上の妨害があったようで、さすがの彼らでも足が鈍ったようです。あと二、三日で到着するのではと思いますが」
雪嵐には神月殿を通じて、月華宮や視察団からの報告が届けられている。凛花や麗麗も、たまにだが明明や朱歌や霜珠からの文を受け取っていた。
（視察団にも妨害が続いていただなんて）
雲蛍州への道中、凛花たちも妨害に遭い、雲蛍州への到着が遅れた。
（妨害を指示しているのは、たぶん――）
「妨害の目的は、朔月妃さまの帰還を阻止し、月桃祭の『古の儀式』を持ち帰らせないことでしょうね」
神月殿からの依頼で、雲蛍州に残る『古の儀式』を調査し持ち帰る。
それを口実に、異例の帰郷が許された。

昨年の星祭で凛花が歌った古の祝い歌は、凛花が『神託の妃』であることを強く印象付けた。これが今回の帰郷を納得させる後押しにもなったのだ。

だからこそ凛花はその期待に応えるため、月桃祭までに戻り、古の儀式を披露しなければならない。

それは紫曄も同じだ。『白銀の虎が膝から下りる時、月が満ちる』という神託を叶えると言い、月華宮を飛び出した。

いまだ解釈が定まっていない『膝から下りる時』とは、凛花が自らの庇護下から出た現在の状況であり、紫曄の手で連れ帰ることで『月が満ちる』。神託が成就するのだと説明した。

二人はそれぞれ成果を持ち帰り、『月桃祭』を成功させる必要がある。

月桃祭は夫婦を象徴する祭祀だ。

皇帝と皇后望月妃――もしくはそれに準じる月妃の二人で儀式を行う。月桃祭で紫曄と共に儀式を行う妃が、望月妃に内定するのだ。

月桃祭は凛花と共に。それが紫曄の願いであり、凛花も望んでいることだ。

「まったく……妨害もいい加減に諦めてもらいたいものだな」

紫曄が面倒臭そうに吐き捨てた。

この妨害は、おそらく弦月妃と董宦官長の手によるものだ。今、月華宮で神託の成

就を望まないのは、董家しかいない。

娘を後宮に入れ寵姫にしたいと考える者や、琥国との結びつきを望み、王女を望月妃にと推す者、いまだ紫曄のやり方に馴染まず反発を覚える者はいる。

だが、その者たちも皆、神託の成就は願っているはずだ。

彼らの望みは月魄国があってこそだからだ。

神託を正しく解釈し成就させられない皇帝は、月に見放されてしまう。それは国が滅びる、または代替わりすることを示唆している。

先代皇帝は、まさにそのいい例だ。『神託の妃』を逃し皇位を追われたのだから。

そして皆、先代皇帝がその座を追われた時の混乱を知っている者ばかり。

「主上。よろしいでしょうか」

じっと考え込んでいた麗麗が手を上げた。

「実は明明からの文に、これまで見かけなかった場所で、弦月宮の侍女を見かけるとありました。今までにない変化は気になります。この度の帰還、警戒に警戒を重ねたく存じます！」

その提案に紫曄は頷き、帰還の道程が決められることになった。

◆

話を終えると、凛花の父は紫曄や琥珀、雪嵐を執務室に招いた。こんな機会はなかなかないので、仕事の話をしたいのだろう。

今後、望月妃になることを考えて、凛花も話を聞きたいと思ったのだが……母に腕を掴まれ、女だけで話をしましょうと微笑まれてしまった。

そして控えていた麗麗にも椅子を勧め、三人だけになったところで母が口を開いた。

「凛花。御子を授かっていたらいいわね」

突然そんなことを言われ、凛花は顔を真っ赤に染めた。

昨晩、紫曄と初めて結ばれたのだと言ってはいないのに、一体どうして気づいたのか。母が持つ情報網か、それとも母の勘なのか。後宮の外でも気を抜けないと、凛花は落ち着かぬ気持ちで小さく頷いた。

別にこういった話題が嫌なのではない。ただ単純に恥ずかしいだけだ。

凛花は後宮に入ってじき一年が経つ。本来の後宮ならば、早く子を！　と、内外から露骨に催促されていたはずだ。

それに、もしかしたら……と期待する母の気持ちはわかる。

「ふふ、気が早すぎたかしら」

「ですが奥様、月華宮でされた占いをご存知ですか？」

「あら。神託の他に、そんなものもあったの？」

麗麗がソワソワした様子で口にした占いとは、昨夜、紫曄が言った『朱歌の占い』のことだ。凛花が月華宮を出る前、その立場を少しでも固めておくために占われた。

（占いの結果は……『春の満月に、白銀に輝く吉報がもたらされる。そして新たな月が誕生するだろう』だったのよね）

この占いは、御子の誕生を示唆しているのでは？　と月華宮中で話題になったものだ。

（子供か）

凛花はそっと自身の腹に視線を落とす。

（嬉しいけど……私、本当に人虎ではなくなったの？）

凛花の胸に、そんな不安がじわっと広がった。

『虎化しない薬』が効き、凛花は月を見ても虎化しなくなった。

だが、それは人虎でなくなったと見ていいのか、人虎には変わりないが虎化しなくなったのか、凛花にはわからない。

（私、ちょっと軽率だったかも）

紫曄と結ばれたことに後悔はない。しかし、もしも子ができていて、その子に人虎の能力を受け継いでしまったら……

（譲り渡す能力そのものが消えたのなら、子はきっと人虎にならない。でも、私は変わらず人虎で、その能力を保持したまま、一時的に虎化の能力を抑え込んでいるだけだったら？）

子は人虎になるかもしれない。

（子供を人虎にしたくない。しなくていい苦労や、苦悩を背負わせたくないと思っていたのに……）

昨夜はどうして、あんなに止まれなかったのか。

凛花はそんなことを思い、同時に紫曄とのひとときを思い出し、また頬を赤らめた。

「あら。顔が真っ赤よ？　凛花」

「凛花さま。どちらにせよ体調をよく整えましょう。ひとまずは月のものが来るかどうかですね」

母と麗麗は、そうねと頷き合い、これから望月妃になる凛花の幸せを願う。

しかしそれは必要のない祈りかもしれない。なぜなら一夜を過ごした凛花と紫曄は、どちらも幸せそうな顔しか見せていないのだから。

◆

そして日暮れ。凛花はドキドキ、ドキドキと鳴る心臓をなだめつつ、じっと月が昇るのを待っていた。

昨夜、『虎化しない薬』を飲んだ直後は虎化しなかったが、今夜はどうだろう。凛花は窓際で、茜色に染まる空を見上げて思う。

（どうか虎になりませんように……！）

「凛花さま、薬湯をどうぞ」

「ありがとう、麗麗」

凛花は知らず知らずのうちに握りしめていた手を開き、茶杯を手に取った。独特な香りがするこれは、王女からもらった解毒の茶だ。

凛花が月の出る夜になると、意志に関係なく虎化するようになってしまった原因である、『長く虎化していられる薬』の効果を打ち消すものだ。

だが、『虎化しない薬』が本当に効いている確証がない今、凛花はこの茶を継続して飲んでいた。

（昨晩、虎化しなかったのは、『虎化しない薬』だけでなく、このお茶の効果もあるかもしれないもの）

凛花は徐々に紫色になっていく夕焼けを見つめ、茶を一気に飲み干した。
すると、凛花の耳に聞き馴染みのある足音が聞こえた。
「凛花」
「紫曄！」
振り返ったところで、近くで控える麗麗の姿が目に入った。そこで凛花は、ハッと気がつく。
（まずい。麗麗がいるのに『紫曄』と呼んでしまった……！）
凛花が紫曄を名で呼ぶのは、二人きりの時だけ。たかが朔月妃が皇帝を名で呼ぶのは許されない。
（あれ……でも私、昨夜も紫曄って呼んでいたかも……？）
紫曄に抱きかかえられ奥宮を出て、麗麗と雪嵐に会ったところで……と、朧気（おぼろげ）な記憶を辿っていると突然、凛花の視界いっぱいに紫曄の顔が飛び込んできた。
「凛花。おかしな顔をしてどうした。体調でも悪いのか？」
「いえ、し……主上」
そう呼び直し、耳元で「二人きりではないのに名で呼んでしまいました」と、こそりと言った。
「なんだ今さら。麗麗の前でくらい構わないだろう」

「でも！　昨夜は雪嵐さまの前でも名を呼んでしまった気がします……」
大失敗をしたと凛花は苦い顔で言う。
「あの、主上。お言葉を挟む無礼をお許しください。凛花さま、雪嵐さまは上機嫌でらっしゃいました！」
「え」
「名で呼んでほしいと思える妃を得られた主上は幸運だと、嬉しそうにおっしゃっていました。私も雪嵐さまも、お二人の仲睦まじい姿を拝見できることを、喜ばしく思っております！」
意外な言葉に凛花は目を瞬いた。いいのか……？　と紫曄を見上げてみたら、紫曄も少し驚いたような顔をしていた。
「いいことを聞いたな。では凛花には、公的な場以外では名で呼んでもらうことにしよう」
雪嵐がいいと言うなら、いいだろう。紫曄がそう言うと、麗麗は大きく頷く。
「いいと思います！　凛花さまは二人といない、月を満たす『神託の妃』なのですから！」
凛花と紫曄は顔を見合わせ、ふふふ、と笑った。
そんな話をしている間に日は沈み、夜空には少し欠けた丸い月が浮かんだ。

「凛花」
「はい」
（大丈夫。月が昇っただけでは虎化していない。最悪は回避している！）
凛花は意を決し、窓から月を見上げ、心の中で『虎に変わりたい』と願う――が、凛花は人の身を保ったまま。虎に変わらなかった……！
「よかった……」
ホッとし力が抜けてしまった凛花は、ハーッと息を吐きその場に座り込んだ。
たった二晩だが、虎化しなかった。ずっとそのような体を求めてきた凛花にとって、とても大きな成果だ。
「凛花」
紫曄は窓側に回り込み、座り込んだ凛花を上から微笑み見下ろす。その肩越しには、これまで凛花を虎に変えてきた月が輝いている。
（……ふしぎ。なんだか月が別のものに見える）
紫曄の呼びかけにも応えず、じっと月を見つめてしまう。
「凛花。月見をするか」
紫曄が顔を近づけ言った。
「……え？」

「麗麗、榻（ながいす）をここに運びたい。手伝ってくれ」
そう言うと、麗麗の手を借り、月が見えるこの窓際に榻（ながいす）を置いた。そして座ったままの凛花を立ち上がらせると、紫曄はなぜか榻（ながいす）の端に座った。
「ほら、来い。存分に月を見上げるといい」
ぽんぽんと自らの膝を叩き、凛花を引っ張った。凛花は抱き留められるように紫曄の胸に倒れ込み、目を瞬いているうちに膝の上に寝かされた。
「紫曄……？」
「虎になろうがなるまいが、お前は俺の妃だ。月だって、人虎だろうが只人（ただびと）だろうが、その目に映る姿は変わらない」
ほら、好きなだけ見つめればいい。紫曄は微笑み言って月を見上げる。凛花はそんな紫曄を見上げ、その視線を追いかけ月を見た。
無言で月を見上げる間、紫曄はゆっくり、ゆっくり、凛花の髪を撫でていた。その指先から伝わるものが、慈しみなのか慰めなのか、凛花には判別はつかない。
だが、とても心地がいいと感じ、紫曄のことを愛おしいと思った。
「――私、こんなふうにじっくり月を見つめるのは初めてです」
しばらくして凛花が口を開いた。凛花は紫曄の膝に頭を乗せ、輝く月をその瞳に映したまま、独り言のように呟く。

「そうか。意外だな」
「ふふ。月は私の中の虎を高揚させ、駆け出すためのものですから」
凛花にとって、月を見上げるのは楽しいことだ。瞳に映した瞬間に、凛花を自由にするものだったから。
跳ねっ返りと呼ばれても、凛花は州侯（しゅうこう）の娘で、次期当主。州の財政を左右する、薬草畑を管理する薬草姫（やくそうひめ）。
いくつもの責任を背負い、しがらみは凛花の手足を縛る。薬草姫という呼び名は、雲蛍州に住む民たちの命を握っているのだと、その重さを凛花に伝えるものでもあった。
「こんなに長い間、静かに見つめることなんてできなかったんです。虎はすぐに駆け出してしまうから……」
虎に変わり、太い手足で月の下を駆け回る間、凛花はただの白虎になることができた。
（私、虎化する体が嫌だったけど、虎になってしまえば楽しくて、あの時間が大好きだったんだ）
「虎になりたいか？　凛花」
紫曄が髪を撫でる手を止めた。凛花はゆるりと、視線を月から紫曄に移す。先程から

ずっと首元をかすめていた、紫曄の長い髪を優しくよけると、凛花は明るい夜のような紫の瞳を見上げた。
「いいえ。私は虎ではなく、望月妃になりたい」
まっすぐな瞳で紫曄を見つめて言った。見下ろす紫曄の瞳が蕩けるように細められ、二人の唇が重なる。
言葉にできない愛しさを伝えるように、紫曄は口づけ、凛花も求める。熱っぽい吐息が漏れ落ち……――たところで、薄暗かった部屋に灯りがつけられた。
「失礼いたします！　臥室（しんしつ）のご用意が整っております。湯浴みのご用意も同様に」
麗麗だ。後宮仕込みらしい絶妙な時機の声かけだが、凛花は一気に頬を赤く染めた。
（そ、そうだった……！　麗麗がいたんだった！）
「では、月見は終いにしようか」
手を差し出され頷くと、凛花は紫曄に抱き上げられた。凛花が驚き紫曄を見上げると、その顔はあまりに嬉しそうで、凛花の胸がそわそわ騒いだ。
「あの、紫曄」
凛花は首を伸ばし、紫曄の耳に口を寄せた。
「なんだ？」
「今夜は……湯浴みをして、早く休みましょう」

眉根をキュッと寄せ、小さな声で言う。胸にはまだ、あのソワソワ、ドキドキした余韻が残っている。だが、言わなくてはならない。

もしも虎化しない状態が一時的なものだったなら、子が出来た時に後悔してしまうかもしれない。母と話した時にも思ったことだ。

虎化は月からの祝福。

たかが人が、女神の意志を拒むことなんて本当にできるのか？

この抑えきれない不安も月からの警告なのではないか。只人（ただびと）よりも鋭い人虎の本能が、虎化の能力がまだ残ることを感じ取っているのではないか。

そんなふうにも思ってしまう。

（紫曄の機嫌を損ねてしまうかもしれないけど……言わなくちゃ）

「あの、」

「わかっている。いつもの夜と同じだ」

若干残念そうな顔で笑う紫曄に、凛花は目を丸くした。

「いや、昨夜のことは俺も我を忘れたというか……」

「ふふっ」

ばつが悪そうなその言葉に、凛花は思わず笑みを零した。その笑いと一緒に、心にのし掛かっていた重石がスーッと消えるように、気持ちが軽くなった。

（よかった。紫曄が同じように考えてくれる人で）

「私もです。昨夜は少々……どうしても、欲しくなってしまって……」

恥ずかしいがそうとしか言いようがない。正しくは、紫曄を自分で満たしてやりたい、自分のものにしたいと思ったのだが……

（なんだか月夜殿下のようね……虎らしい思考だった……？）

「ははは！　お互い様か。――麗麗、そういうわけだ」

控えていた麗麗に、紫曄が言葉を向けた。今の会話を聞いていただろう麗麗には、動揺が浮かんでいた。おそらく二人が結ばれたことを心から喜び、やっと月妃として幸せを掴むのだと、祝福していたからだろう。

（でも、今のうちに言える流れがきてよかったかも）

喜びに水を差すのは申し訳ないと思うが、一番身近な侍女である麗麗には正しい現状と、凛花の気持ちを知っておいてほしい。

「麗麗、悪いがしばらくはそういうことだ。月華宮へ戻っても頼む」

「は、はい！　承知しました、主上」

「ああ。では……臥室（ししつ）じゃないな。凛花は麗麗に任せよう」

「え？」

紫曄は抱きかかえていた凛花を腕から下ろす。

「俺も湯浴みをしてくる。一緒に入るのは目の毒だからな」
紫曄はそう言って笑うと、また後でと言い残し凛花の部屋を出た。
「……なんだかバタバタしてごめんなさいね。麗麗」
「いいえ！　私こそ、凛花さまのお気持ちを量れず……ですが、どうぞお任せください！　主上に再び『頼む』とのお言葉を頂きましたし、今後も私が凛花さまをお支えいたします！」
頼もしく、ありがたい侍女だと凛花は微笑む。今度は心に立ちこめていた、不安というモヤが消えていくようだ。
（でも、なんのことだろう？）
麗麗の言葉に一つだけ気になるところがあった。
「ねえ、麗麗。〝主上に再び『頼む』〟って言われたっていうのは……？　何か頼み事をされていたの？」
「ふふ。はい！　凛花さまが虎になったまま人に戻れなくなっていた時に、主上から御文を頂いたのです。私は行方知れずの凛花さまを朔月宮で伏せっておられることにし、そのご不在を隠しました。その時に『決して騒がず、不在を悟られぬように頼む』と、主上は私におっしゃったのです」
「ああ……あの時ね」

虎のままではどこにも行けず、朝を待って輝月宮へ駆け込んだのだが……凛花が一時、行方不明となった時に、紫曄と麗麗にそんなやり取りがあったとは。
「皇帝であるあの方が、一介の侍女でしかない私に『頼む』と……驚きました」
「ふふ。紫曄らしい……」
妃の侍女に、命令ではなく、頼むと言える皇帝はきっと多くない。
自身に跪く者を人として認識し、信頼できる。そんな紫曄だから即位後すぐ、国の端にある雲蛍州へ、長年届かなかった補助金をしっかり届けてくれたのだろう。
雲蛍州は月華宮からは遠く、普通なら皇帝が訪れることのない土地だ。紫曄が知っていた雲蛍州は、最後に併合された元小国で薬草の産地。民は数十万人。その程度のはず。
だが、その数字は、雲蛍州で暮らす人々なのだと、紫曄はそう理解できる皇帝なのだ。
「凛花さま。これは主上には秘密ですが、私は凛花さまを第一にお仕えしております。しかし、主上もまた、真摯にお仕えするべき主であると思っております」
「ふふふ。ありがとう、麗麗。私もそう思うわ」
麗麗にそう言わせる紫曄のことが誇らしい。紫曄は、いい皇帝で、いい夫だ。
昨夜は二人とも、『もしも』を考えることすら忘れてしまっていたが、凛花も、紫

曄も、結ばれたことに後悔はない。一晩が過ぎても余韻に浸るほど嬉しく思ったが、それでも軽率だったと頷き合った。

子のことは、二人だけの問題ではないのだ。皇帝と皇后の子となれば、国の大事。

（大丈夫。紫曄となら、何がどうなろうと共に歩める）

凛花はまだ見ぬ子の幸せを、明るい月光に思った。

◆

すっきりと晴れた日の朝。到着を待っていた視察団が到着した。一日だけ休息の時間を取り、物資の補給が済んだら出立することとなった。

凛花たちの準備はもうできている。あとは雲蛍州との別れを済ますだけだ。

「紫曄。私の大好きな場所へ行きませんか？」

麗麗を連れて誘いにきた凛花は、狭い袖と短い丈の裙（スカート）という動きやすい姿。それに籠を携えている。

「ああ、いいな」

「ふふ！　では、こちらにお着替えを。引っかけてしまったり、草の汁が付いたりしますから」

「このままでも構わんぞ？」

紫曄が着ているのは旅装束だ。月華宮で身に着けるような、袖も裾もたっぷりとした衣装ではない。

「いいえ。皆が余計に緊張しますから。こんな上等な衣で畑はちょっと」

紫曄は小首を傾げつつ、そういうものかと頷いた。

着替えを済まし向かった先は、凛花が世話をしていた段々畑だ。冬場は休ませている畑も多いが、冬に収穫するものや、春を待つ薬草の世話もある。

紫曄がわかりそうなものは、蓬（よもぎ）や枇杷（びわ）の木あたりかな？　と、凛花は案内する畑を選び進む。

「あっ！　凛花さま～！」

「凛花さま！　これ上手くいったんです！　成果を見てくださいー！」

「あ、麗麗さまいいところに！　ちょっと力をお借りしたいことがあるの！」

畑に入るなり、あちこちから声が掛かった。

皆、地面に屈んだまま、チラリと笠をずらして手を上げる。

「力仕事のようですね。行って参ります！　凛花さま」

「よろしくね、麗麗」

ずっと畑仕事を手伝っていた麗麗は、すっかり皆に馴染んだ。もはや小花園と同じ

か、それ以上に頼りにされている。
「麗麗はさすがだな。溶け込むのがうまい」
「はい。一生懸命なのが伝わるのでしょう」
凛花も成果を見に行きたいが、しかし今日は紫曄が一緒だ。一人残して畑に入るのは……と思っていたら、紫曄が凛花の腕から籠を取り上げ言った。
「行ってくるといい。俺は仕事を眺めていよう」
「いいのですか？　えっと……では、あの辺りは滑りやすいので気をつけてください。あと、そちらには山羊がいるので髪を食べられないように……」
「ははは！　大丈夫だ」
紫曄の笑い声で、畑仕事中の幾人かが顔を上げた。
「えっ……」
「いっ……」
その顔を見た者が、こてん、ぺたん、と次々無言で尻餅をついていく。
まさか皇帝が畑にまで来るなんて。
皆、笠をかぶっているものだから、紫曄の顔までは見えていなかった。きっと、たまに麗麗と一緒に来る雪嵐だなと思っていたのだ。
彼らも今はだいぶ慣れたが、それでも雪嵐の身分を考えると、顔をまじまじと見る

のは恐れ多い。だから今日も足下をチラリと見て、雪嵐だろうと判断したのだが――
「主上……？」
「り、凛花さま？」
作業の手を止めて、かすれる声で誰かが呟いた。
「あ、そうなの。今日は主上にも畑を見てもらおうと思って」
凛花はなんでもないように言うが、皆はヒュッと息を呑んだ。そしてハッと気づく。尻をついた姿勢で、しかも笠をかぶったまま無遠慮に見上げていた！　と。慌てて起き上がり、笠を取ろうとするがどうにも上手くいかない。
「よい。皆、本当に気にせず仕事を続けてほしい。俺のことは凛花と同じように扱ってくれ」
そんなわけにいくか……!!　と、畑中からそんな声が聞こえてきそうだが、凛花と紫曄は顔を見合わせ笑う。
「いいのよ、皆。さあ、主上のことは気にせず仕事へ戻って。では紫曄、私も少し行ってきます！」
凛花は手を振ると、呼ばれたところだけでなく、あちこちの畑に踏み入っていった。
（大切な畑を見られるのは、たぶんこれが最後だ）
心の奥でそう思いながら畑を見て回る。時たま紫曄の手を引き、小花園にはない薬

草を見せたり、改良中や、試験中の薬草を見せたりした。
「……この畑はすごいな」
紫曄が感心したように呟く。
「この一帯は実験場だったのか」
「はい。稀少な薬草や扱いが難しいもの、それから逆に、ありふれていても大量に使う薬草は、改良して通年栽培できないか、収穫量を増やせないかなど試しています」
「なるほど。確かに『薬草姫』だな。見ることができてよかった」
「ふふ。でも、ここはもう私の手を離れています」
凛花は静かな気持ちでゆっくり見回した。
「少し寂しいですが……この景色が今あるのは、私ではなく、皆の力です」
雲蛍州に帰ってきた日。なんの変わりもない薬草畑を見て、ここは自分がいなくても回るのだと寂しく思った。だが今思うのは、それだけではない。
凛花がいなくとも、雲蛍州はこうしてずっと続いていく。凛花が愛したこの場所は、仕事に従事する民の手が守ってくれる。そう誇りに思う。
「『薬草姫』なんて、いなくても大丈夫」
「――いいえ！　そんなことありません、凛花さま」
一人の少女が立ち上がり、畑の中から声を上げた。

立ち読みサンプルはここまで

「畑を維持できたのは、凛花さまが細かく記録を付けて、改良案や世話の仕方を提案してくださっていたおかげです！」
「そうですよ、凛花さまの書き付けがなければ大変でした。あ、今もちゃんと記録を付けていますからご安心ください。記録は宝ですもの！」
凛花の補佐役として、観察や記録付けをしていた者の一人だ。
すると、近くにいた他の者たちも、口々に同じようなことを言う。
「凛花さまがここを離れても、あの書き付けのおかげで、変わらず世話を続けられています」
「そういう意味では、この畑には今も『薬草姫』がいるんですよ」
「凛花さまは、私たちを導く守り神のようなものです。ふふふ！」
「みんな……」
さあっと風が吹き、少し苦くて爽やかな薬草の匂いが立ち上る。その匂いが凛花の胸を覆っていた、最後のもやを取り払っていく。
（私ったら、勝手に寂しく感じて……馬鹿ね）
自分が残したものが、ここには息づいている。
寂しく思うようなことは何もなかったのだ。
「ありがとう、皆。これからも畑をよろしくね」